

第37回（令和3年度）

# 石川町少年の主張大会

—今、私たちが伝えたいこと！—

## 作品集



主催 石川町青少年健全育成推進協議会

後援 福島民報社/福島民友新聞社/町民ニュース社/夕刊いしかわ新聞社

## 《第37回石川町少年の主張大会作品 もくじ》

・『世界の平和に向けて』					
石川小学校	6年	のざき 野崎	あるま 有真	.....	1
・『ぼくらの未来のために』					
石川小学校	6年	かなざわ 金澤	れいや 怜也	.....	3
・『できることから始めよう』					
石川小学校	6年	とみおか 富岡	ゆめ 由愛	.....	5
・『男だから？女だから？』					
沢田小学校	6年	なかじま 中島	みく 美紅	.....	7
・『私は守りたい』					
野木沢小学校	6年	えんどう 遠藤	かこ 可子	.....	9
・『自給率から「食」を守る』					
石川中学校	3年	ながぬま 永沼	りこ 理子	.....	11
・『助け合い』					
石川中学校	3年	みぞい 溝井	さよ 彩世	.....	13
・『私の方言についての考え』					
石川義塾中学校	2年	うすい 薄井	りこ 莉子	.....	15
・『「All Lives Matter」と言える社会へ』					
学校法人石川高等学校	2年	みどりかわ 緑川	ちさ 知紗	.....	17
・『一度きりの高校生活』					
福島県立石川高等学校	3年	ほりい 堀井	はるか はるか	.....	19

## 《少年の主張大会の趣旨》

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次世代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝えて理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張大会は、青少年にとってこれらの契機となることを期待するとともに、青少年の健全育成に対する町民の理解と関心を深めていただくことを目的として実施しました。

《講 評》 石川町社会教育指導員 三森孝則

## 『世界の平和に向けて』

石川小学校 6年 <sup>のざき</sup>野崎 <sup>あるま</sup>有真

今、世界では、新型コロナウイルス感染症のために、世界中の人々が苦しんでいます。そして、新型コロナウイルス感染症を治そうとがんばっている人たちもたくさんいます。

日本でも新型コロナウイルス感染症だけでなく、事故や事件などの悲しいできごとが毎日のように起きています。

そんな世界や日本の様子から、ぼくは世界の平和について考えるようになりました。

世界の国は、全部で百九十四か国あります。その中で戦争など武力による争いごとをしている国は四十五か国もあるそうです。世界の国の約四分の一が武力による争いごとをしていることになります。

そこで、ぼくは戦争などの争いは、なぜ起きるのか調べてみました。その原因は大きく五つに分けられます。

一つ目は「民族」です。民族のちがいが文化の考え方のちがいになり、争いを起こす原因になります。

二つ目は「宗教」です。信じる宗教のちがいが考え方のちがいになって、争いの原因になります。

三つ目は「資源」です。金やダイヤモンド、石油やウランなど鉱物資源が豊富な国では、それをめぐって武装グループが独せんをねらって争いを起こし、一般の市民もまきこんだ争いになります。

四つ目は「政治」です。一人の人や少人数の組織が政治を独せんする独裁政権が続いた時に、その国の住民が政治に反対して、国内での争い「内戦」が起きることがあります。

五つ目は「領土」です。例えばアフリカの場合、ヨーロッパの国々がアフリカの国々を支配した植民地の時代に、ヨーロッパの人々の都合で勝手に国が分けられました。この時に引き裂かれた国境線が実態に合わずはっきりしないそうです。そのために国同士が領土を主張する紛争が起きています。

ぼくは、こんなにも戦争につながる原因があることを初めて知りました。戦争は人

の命をうばうだけではなく、人の心にも大きな傷を残します。争いのために、人間らしい生活を送ることができない人たちもいます。

ぼくは、争いごとに対して、もっと平和な解決方法はないだろうかと考えました。世界中の人々が話し合い、おたがいに納得し合ったり、尊重し合ったりできるような世界になればいいと思います。

ぼくにはまだ、世界の平和のために行動したり、なにかの活動に参加したりすることはできないけれど、戦争やふん争で傷ついた人や国への募金などで、世界の平和に協力できます。また、「自分のためだけ」「自分の国だけ」ではなく、相手の考えを理解したり、相手の気持ちを思いやったりして、みんなが幸せになるように心がけた生活を送ることができます。自分にできる世界の平和につながる行動を積極的にしていきたいと思います。

(講 評)

国際紛争について、詳しく勉強していますね。それを踏まえて「世界の平和」について発表してくれました。自分だけが幸せならいいという考えを持つ人が多い中、有真君が「世界の平和」に関心を向けていることが素晴らしいと感じました。しかし、国際秩序を守らない国、民族問題、宗教問題、資源問題等、国どうしを理解し合うのは予想以上に難しいのも現実です。有真君を含めた若い人たちが関心をもって、考え、行動することはとても大事なことです。同時にもっと視野を広げるためにも、勉学に励んで社会で活躍できる人になってほしいです。

## 『ぼくらの未来のために』

石川小学校 6年 <sup>かなざわ</sup>金澤 <sup>れいや</sup> 怜也

みなさんは、SDGsを知っていますか。ぼくは最近、テレビの特番で初めてその言葉を聞きました。そして、SDGsのカラーも知りました。知ったとき、(あ、テレビのゴミ拾いの旅のカラフルマスクの色だ。)と気づきました。(ゴミ拾いはSDGsに関係することだったんだ。)

ぼくはSDGsとは、どんなことなのか、ユーチューブやインターネットで調べてみました。SDGsとは、持続可能な社会を世界レベルで実現するために、国連で合意された世界共通の目標です。世界の国や地域が協力して持続可能な開発を目指すSDGsは、二千三十年までに十七の目標を達成すると決められました。持続可能な開発とは何か？今だけではなくずっと続けていけることということが持続可能、今あるいろいろな問題を解決してみんなが安心して満足した暮らしができるようにすることが開発です。それは、貧しい人やおなかをすかした人がいなくなる、健康で長生きができる、きちんと教育が受けられる、差別されずに平等が守られる、などいろいろな持続可能な開発があります。

SDGsは世界の明るい未来のために、みんなでがんばらなければならないことなのだと、ぼくは理解しました。

毎日の生活の中に、ぼくができるSDGsはないかと考えてみました。世界では、二十二億人が安全な水を使えず不衛生な水を使っています。朝起きて顔を洗って歯をみがくとき、お風呂に入ってシャワーで流すとき、手洗いのとき、安全な水が手に入らない人たちのことを思い出して、ぼくは水を大切に使い節水します。食べられるのに、捨てられている食品は日本で年間、東京ドーム五つ分もあります。給食や家のご飯のとき、ぼくは残さず食べて、フードロスをなくします。一日二百円より少ないお金で生活する人を貧困とすると、十人に一人が貧困で世界に七億人もいます。ぼくは、お金のむだづかいをしないで、本当に必要なものかを考えて、大切にお金を使います。学校に通学できない子どもが世界にたくさんいます。なぜ通学できないかというと、その国で戦争が起きていたり、お金がなかったり、女の子だからという理由で通学できなかったりするそうです。学校に行くことが当たり前ではなく、幸せなこと

なので、ぼくは、学校で楽しく勉強し、友達と仲よく協力して生活します。その他にも、ごみを分別すること、落ちているごみを拾うこと、エコバックを使うこと、自然や生き物を大切にすることなど、身近なSDGsをやっています。

ぼくはこれから、ぼくのできるSDGsをどんどん実行していきます。二十三十年ぼくは二十さいです。大人になったぼくたち、ぼくのまわりの人たち、世界のみんなが幸せになっているように……。ぼくらの未来のために今からがんばります。

(講 評)

SDGs (エスディージーズ) とは「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称で、貧困をなくす、質の高い教育、飢餓ゼロ、全ての人に健康と福祉、クリーンエネルギー、人や国の不平等をなくす等々17の目標を2030年までに達成しようとするものです。怜也君は詳しく勉強されていますね。小さなことでも自分にできることを実行している事は立派なことだと思います。自分だけでなく、友だちなどにもこの運動を広めていくことによって怜也君たちの未来は明るいものになっていくと信じています。頑張ってください。

## 『できることから始めよう』

石川小学校 6年 とみおか 富岡 ゆめ 由愛

「由愛ちゃんたち、ヘアドネーションやってみたら？」

と、ばあちゃんが言いました。

「ヘアドネーションって何？あのウィッグにするやつ？聞いたことはあるけどすごく長い髪じゃないとダメなんでしょ。私たちにもできるの？」

一年前の秋、運動会の練習を始めたころ、髪の毛が長くてじゃまなので髪を切ろうと決めたときのことです。ヘアドネーションが新聞の記事によく出てきていたので、わたしは興味がありました。そのころ、横浜に住んでいるいところから、

「ヘアドネーションに髪を寄付しました。」

とメールがありました。私たちにもできるかなと考えていたときに、ばあちゃんがヘアドネーションをすすめてくれたので、私の心が動き、やることに決めました。

ヘアドネーションとは、自分の髪を切って寄付し、その髪で作られた医りょう用のウィッグを、髪を失った子どもに無料で提供する活動のことです。

さっそく、町内の美容室に行って髪を寄付できるか聞いてみました。新聞などでは三十センチメートル以上の髪と書いてありました。姉の髪は十分長く、条件を満たしていましたが、私の髪はそんなに長くないので、私は心配になりました。しかし美容師さんが

「美容組合が協力しているライオンズクラブでは、十五センチメートルあればあつってくれるよ。大じょう夫。」

と言ってくれたので、髪を切ることにしました。美容師さんは手慣れたもので、私の髪を少しずつ輪ゴムでしばり、八本ぐらいに束ねて送る準備をしてくれました。私の髪は十五センチメートル、私の姉の髪はなんと、三十五センチメートルでした。一つのウィッグを作るのに、五十～百人分の髪が必要だそうです。少しでも私の髪がだれかの役に立ってくれればいいなと思いました。

がんの治りょうによる副作用や交通事故などで髪を失い、学校生活や日々の暮らしをスムーズに送れない子どもたちがいます。ヘアドネーションは、そのような子どもたちの生活をサポートすることができるすばらしい役割を果たしています。そのよう

な活動で私の髪が役に立つと思うと、とってもうれしい気持ちで心が温かくなりました。

後日、ライオンズクラブから感謝状が届きました。私は、私たちの髪が確実に活躍していることをほこりに思いました。

ヘアドネーションを通して、私にもできること、何気ない行動が人の役に立つこと、そして何人かの子どもたちの心を明るく前向きにすることができると知り、そんな活動をこれからも続けていきたいと思いました。

みなさんも、自分でできることから始めてみませんか。その行動が自分への自身・希望となり、人と人をつなぎ、だれかの心へ届くと、私は思うのです。

(講 評)

「ヘアドネーション」をすすめてくれたおばあちゃんはとても素敵なお方ですね。由愛さんの髪の毛で作られた「ウィッグ」を贈られた方は、大変感謝していると思います。「ヘアドネーション」に限らず、小さなことでもいい、人の役に立つ事はいっぱいあります。由愛さんの今の優しい心を持ち続けて、人の役に立つ素敵な大人になっていくことと信じています。頑張ってください。



## 『男だから？女だから？』

沢田小学校 6年 <sup>なかじま</sup>中島 <sup>みく</sup>美紅

皆さん、日本の生活は男女平等だと感じますか。

私は、男女平等について皆がもっと意見を出し、話し合い、改善していくべきだと思っています。今、日本では、女優を男性と同じく俳優と呼んだり、体の性と心の性がちがう「トランスジェンダー」の人がテレビに出たりして、男女平等、そして多様性を認める考え方がどんどん広がっているように思います。けれど、男女平等については、まだまだ課題がたくさんあると思います。

例えば、おもちゃで考えます。私は小さい時、男の子が遊んでいた車のおもちゃを見て私も遊びたいと思っていましたが、これは男の子用だなと思い、素直に家族に言えませんでした。六年生になった今はそんなふうには思いませんが、今考えると素直に言えていればよかったな、と少し後かいています。だから、私みたいな気持ちになる人が少なくなるとういなと思います。

テレビ番組の例でいえば、戦隊ものを女の子が見てもいいと思うし、プリキュアやセーラームーンを男の子が見てもいいと思います。でも、素直に「見てる」「好きだ」という意見を言えないふん囲気があると感じます。

他の人は男女平等についてどう思っているのか、クラスで聞いてみました。男子はだしなくても仕方ないけど、女子はしっかりしていないといけないというのがおかしいと言った声、男子はあぐらをかいてもいいけど、女子は注意されるのが納得できないといった声、大人が女子には優しく、男子には厳しく接しているように感じるということがあるという不満の声などが挙がりました。

こういった意見を見ると、私以外にも男女平等に不満があると思っている人がたくさんいることが分かります。しっかりする、だししない、に男子も女子も関係ありません。兄だから、姉だから、ならまだ理解できます。あぐらについては、私も母や姉に注意されることがあり、腹が立ちました。確かに行儀は悪いかもしれないけれど、正座などより楽な姿勢なので、女性はだめということには納得できません。でも、言い返せませんでした。

このように、「男だから、女だから」といって考え方や行動を決めつけるのではなく、

男女平等の意識を広げるべきだと思います。

もちろん、体力的な差などから、男女平等にできないことはあります。でも、ただ昔からそうだから、という理由で平等でないことがとても多い気がします。私が経験してきたことや、友だちが感じていることには、納得できない男女差別がたくさんあります。ですから、一人ひとりがおかしいのではないか、不平等だ、と感じていることを我慢しないで出し合い、皆で考え直すことで、今よりもっと男女平等が当たり前の「気持ちの良い社会」を実現できたらと思います。

(講 評)

美紅さんは男女平等について発表してくれました。自分が疑問に思ったことをクラスの友だちと話し合ったそうですが、それはとても大事なことです。話し合うことでお互いの考えを共有し、意見の違いからは多くを学ぶことができます。人として、自分らしく生きていくために、これからもいろいろなことに興味を持ち、学び、視野を広げていってください。

## 『私は守りたい』

野木沢小学校 6年 <sup>えんどう</sup>遠藤 <sup>かこ</sup>可子

「このままだと、地球に住めなくなるのではないだろうか。」

五年生の時にコミュタン福島に行った。そこでもらったパンフレットを家に帰ってきてから見ていたとき、私はなんだかこわいような気持ちになった。その時は、すぐに忘れてしまったのだが、六年生になって道德の時間に、「地球があぶない」という資料を見て、思い出した。

今、世界中で環境問題が起こっている。私たち人間にも被害がある。たとえば、最近では台風やこう水などがひんぱんに起き、土砂くずれなどで命を落としてしまう人もいる。

この原因の一つは地球温暖化で、人間が、森林を伐採しているために地球の温度が冷えなくなっているようだ。しかし、森林を伐採しているのは、私たち人間が快適に暮らすためだと思う。

インドネシアのスマトラ島では、パーム油や紙を生産する農地や植林地をつくるために、熱帯雨林が三十年で半分以下になってしまったそうだ。自分たちが快適に暮らすために、自分たちがひがいを受け、命を落としてしまうなんて、おかしい。私は、命の方が大事だと思う。

しかし、ひがいを受けているのは、人間だけではない。動物たちにもひがいがある。

例えば、北極では、地球温暖化のせいで、氷がとても少なくなってきているようだ。ホッキョクグマは、氷の上で狩りをするため、氷が少なくなると狩りの期間が短くなり、えさを十分にとれなくなってしまいうさそうだ。調べた資料の写真では、とてもやせてしまったホッキョクグマが写っていて、かわいそうになった。私たち人間は、自分たちのことしか考えていないと思う。自分が快適に暮らすためには何をしてもいいわけでもないのだから、動物たちのことも考えなければならない。

それでも、希望もある。昔は、家庭で使った水をそのまま川に流していたそうだ。そのせいで、東京の多摩川では、水がきたなくなり、ほとんどの魚が住めなくなってしまったそうだ。写真でも、川に大きなごみがあり、一面あわだらけになっている。しかし、現在の多摩川の写真を見ると、緑が多くとてもきれいになった。アユやウナ

ギも住めるようになったそうだ。地球環境のことを考えて東京の人たちが努力したからだと分かった。

地球上には、人間の他にもいろいろな生き物が住んでいる。人間は、その中でも一番、知識があり技術もあるのだから、地球を守るためにがんばらなければいけないと思う。

私には、地球全体を守るのは難しいけれど、大好きな野木沢の自然を守ることはできる。ときどき、ごみが落ちているのを見かける。これからは進んできれいにしたいと思う。みんなが心がけることで、自分たちの住む地球も、動物も守ることができると思う。

(講 評)

可子さんは、現在、世界中で直面している「地球環境問題」について発表してくれました。現実の社会の中で起きている問題を素直に指摘していて、私たちも考えさせられる内容です。「世界中の生物の生態系」や「多摩川の現状」について、よく学習されていて、わかりやすい内容でした。まずは地元の自然を守ることから始めていることは立派なことだと思います。可子さんのような考えを持った人が世界中に増えてくればより良い世界になると思いました。そう願っています。

## 『自給率から「食」を守る』

石川中学校 3年 <sup>ながぬま</sup>永沼 <sup>りこ</sup>理子

皆さん「食糧自給率」とは何かご存知でしょうか。社会科の学習などでも触れていたため、少なからず聞いた事はあると思います。今日本では、この「食糧自給率」の低さが問題となっています。

食料自給率とは、食糧供給に対する国内生産の割合を示す指標の事です。これが低いと、食料の多くを海外からの輸入にたよっていることとなります。食糧自給率にはカロリーベースによるものと、生産額によるものの、二つの表し方があります。生産額での表し方を用いると日本は六十六%、自給率の高いカナダは二百二十五%、アメリカは二百二十三%と、日本の自給率がとても低い事が分かります。今後世界では人口の増加や地球環境の悪化により、食料が不足し輸出が止まってしまう可能性があります。そうすると外国産が手に入らず、国内での供給が滞ってしまいます。

原因の一つとしては、日本の食文化の変化が挙げられます。国産の米や野菜、魚などを多く使用していた和食から、小麦や肉などの外国からの輸入品を多く使用した洋食が流通してきた事により、自給率が大幅に下がったように考えられます。

この問題を解決するためには国産のものをたくさん食べる必要があります。例えば、スーパーなどにある、地産地消、地元の農家さんの売り場コーナーの品を買う事が挙げられます。その野菜を買えば、食品の運搬によるガスの排出も減り自給率だけでなく、地球温暖化対策にもなります。私の家も、買い物の際は必ずそのコーナーを見るようにしています。余談ではありますが「同級生の家の野菜だった。」なんて面白い出会いなど、地域の人とのつながりもありました。中国やアメリカ、メキシコ産などの外国産を陳列棚に見かけます。「どれも安いし節約できそう。」と私はよく思います。ですから、節約のためにも安い外国産の食品を買いたくなるのは分かります。しかし、ほとんどが遠方からの輸入により、保存用の薬品などが多く使われています。それならば、何十円かの差であるとするのなら、少しでも安全な国産の食材を優先して買ってみてはどうでしょうか。

他には和食を多く食べることも挙げられます。和食より洋食派という方も多くいると思います。しかし、先ほど述べた通り、和食に比べ洋食は自給率が低く、おまけに

料理の脂肪率も高くなっています。それぞれの献立を挙げて比べてみましょう。例えば、ご飯、なめこの味噌汁、鰯の塩焼き、青菜の胡麻和え、ジャガイモの炒め煮の五品の和食献立で供給熱量七百一カロリー、脂肪割合は二十%、食糧自給率が七十%。では、洋食の献立ではどうでしょう。フランスパン、コーンスープ、ペッパーステーキと付け合わせ、サラダ菜のサラダの四品で供給熱量七百六十四カロリー、脂質割合が四十%、食糧自給率が十七%となっています。自給率にはかなり差がありますし、脂質割合は、洋食の方が和食に比べ二倍近くあります。洋食にも食生活を豊かにするためにとても大切な存在ですから、毎日和食を食べるべきだと一概には言えません。ですから、洋食の献立を数回、和食の献立に変えてみてはどうでしょう。朝食をパンからご飯に変えるだけでも構いません。健康のためにも、和食を食べるようにしてみてください。些細なことではありますが、みんなで行えば効果は絶大のはずです。

私は地球温暖化など、地球規模の問題も重要だと思いますが、まずは身近でわかりやすく行動しやすい、とても大事な問題を率先して解決したいと思っています。

「食」は生活の三大要素の一つを司っており、なくてはならない存在です。まずは食料自給率という観点から、些細な事からで構いません。私と一緒に「食」を守っていきませんか。

#### (講 評)

理子さんは生活三大要素の一つ「食」について発表してくれました。「食料自給率」「カロリー計算」などについて細かく表されていて驚きました。発表内容も大変参考になり良かったと思います。「食」を守るということは地球環境保護にもつながります。

アメリカでは大量の食用牛を飼育するために莫大な穀物を必要とするため、農薬を使用し広大な土地で穀物を栽培し続けた結果、地下水が干上がり、砂漠化が進んでいるそうです。理子さんの発表された「食料自給率」と食品ロス改善も併せて「食」を守っていきましょう。

## 『助け合い』

石川中学校 3年 <sup>みぞい</sup>溝井 <sup>さよ</sup>彩世

皆さんは、「助け合い」というワードを聞いてどのように思いますか。もちろん「助け合いは大切だ・必要である。」という人や反対に「別に気にしていない。」や「時と場所による。」という人など、考え方や捉え方は人それぞれだと思います。私はそうしたいろいろな考え方がある中でも「助け合いは大切・必要だ。」という考え方をしています。

私には助け合いが大切だと考えるようになった大きなきっかけがありました。それは、二年前に起きた「令和元年東日本台風」の豪雨により、自宅が床上浸水という被害を受けたことです。川の水が引き、朝から家の中に入った泥を外に出したり、除菌したりなどの作業をしていると、友達とそのお母さんが片付けの手伝いに来てくれました。家族だけで片づけをしていたので、手伝いに来てもらったときはとても嬉しかったのを覚えています。また数日後には、ボランティアの方が来てくれたり、助け合い募金が始まったりしました。片付けがある程度終わった頃、祖母の友人は「ボランティアの人たちのおかげで早く片付けが終わりそうだ。」などと話をしていました。私の家も同じで、ボランティアの方々が石川町に来てくださったおかげで片づけが早く終わりました。そのとき、「助けてくださりありがとうございました。」という感謝の気持ちでいっぱいでした。

しかし、日本全体や世界規模で見ると「助け合い（人助け）ランキング」での日本の総合順位は百二十六カ国中百七位で、先進国の中では最下位というランキングでした。そしてある調査では、助け合いにあふれる社会について二十代から三十代の約四十％は「共感できない、あまり共感できない」と答えています。また、「知り合いに助けを求めることができる」という人は六％、「知らない人に助けを求めることができる」という人は四％とどちらも一割に満たないのです。こうした状況からか「社会が助け合いにあふれている」と答えた人はわずか二％でした。

ですが、「助け合いにあふれた社会」に共感できる人は、やや共感できる人も含めると七十七％にのびります。理想はあるけれど行動が伴っていないことが分かります。また、寄付への関心があるのは十二％、ボランティアへは八％とチャリティー活動全

般への関心が低いことも分かりました。この結果から、日本では助け合いがまだまだできていないのではないかと考えました。私は「助け合いランキング」での日本のランキング上昇や言葉だけで終わらせるのではなく、「助け合い」の行動をして人前でも堂々とできる人が増えたらいいなと思います。もちろん最初から全員ができるとは思いません。だから、石川町から全国へと助け合いを広められたらいいと思います。石川町の中でもまずは石川中学校から「助け合い」を大切に行動に移せるようにしたいです。そうすれば、今後の日本や未来の自分のためになると思います。小さなことであっても、困っている人がいたら助け合うということをも自分でも積極的に行動に移したり、学級や学年での活動で実践したりできるようにしていきたいと考えています。

小さな助け合いが、今後の人生や未来を変えたり、役に立ったりすると私は強く思っています。いつか再び災害などが起きたら「令和元年東日本台風」の際に多くの方々に助けてもらったときのように、私はボランティアに参加したり、チャリティー募金で募金をしたりしたいです。私一人でできることは少ないと思いますが、困っている人を一人でも多く「助け合い」という思いやりの気持ちをもって助けたいです。そして、「助け合い」が日本中に広がれば興味をもつ人も増え、良い世の中になると考えます。なので、私は「助け合い」を大切にしたいと思います。

(講 評)

「助け合い」、本当に大事なことだと思います。人は一人では生きてはいけません。「衣」「食」「住」すべて誰かが作ったものの恩恵を受けて生きています。彩世さんは、「助け合い」の大切さを発表してくれました。若い人の中には「助け合い」について「興味がない」という考えの方も多いは確かです。そんな中で、彩世さんは、困っている人を「助けたい」という思いやりの心をもっていることは素晴らしいことだと思います。「助け合い」の心が日本中に広まっていくことを願っています。



## 『私の方言についての考え』

石川義塾中学校 2年 薄井 莉子

私が話すのは「方言・訛り」についてです。

方言というのは、その地域特有の言葉のことを指し、訛りというのはその地域特有の発音のことを指します。だから、「関東の言葉は共通語で地方の言葉が方言」というイメージがありますが、全部共通語というわけではなく、また、方言には共通語と同じ言葉でもその意味が違うものがあります。一つ挙げると「こわい」という言葉です。一般的に思い浮かべるのは、感情の「怖い」ですがこれは、東北の方言だと「疲れた」とか「辛い」という意味があります。

私は、今では共通語に近い発音や言葉を使っていますが、昔は、父と祖母の影響で、かなり訛っていたし方言で話していました。私自身そんなに気にしていなかったですし、みんなも気にしないと思っていました。

その考えが変わったのは小学校に上がった時です。あるとき、テレビを見ていると、自分の発音は変なんじゃないかと思い始めました。そんなに大した出来事ではないのですが、私にとっては、かなり恥ずかしく、ショックな出来事でした。その時から気をつけて、発音が変にならないように、映画や本で出てくる言葉をなるべく使うようにして、訛りや方言で話すこともほとんどなくなりました。そうすると父や祖母が訛っているのが少し恥ずかしくなりました。

ある時、国語の授業で青森の訛りや方言の入っている物語を読みました。その物語の主人公も周りの人たちからの方言や訛りを指摘されることにコンプレックスを感じて悩んでいました。でもその主人公は最後まで自分の言葉や発音で話すことを続けていました。家族との会話では、ほとんどが方言でしたが、会話の距離が近く、とても仲が良さそうに見えて、自分は親のことを一緒にいて恥ずかしいと思い、避けているところがあったので、主人公とその家族とのやりとりが少し羨ましいと感じたのと、自分も家族とこんなふうに仲良く話せるようになりたいと思いました。また、周りに流されて、自分の方言や訛りは恥ずかしいもの、と感じていた自分が情けなくなってきました。

母に訛りや方言のことを聞いてみると、母は、「昔、震災があった直後は福島の人

訛りはわかりやすく、『あの人福島の人だから近づかないほうがいい』と言われたこともある。だから極力話さないで、訛りや方言も使わなくなった。」と私に教えてくれました。さらに友人との会話の中でも、「関西の方の方言と違ってきつい印象がある」と聞きました。私はそれを聞いて、とても悲しくなりました。訛りがあるないだけで判断されて、その地域で過去にあったことが原因で、陰口を言われたり、あまりよく思われなくなったりして、そのせいで、その土地の方言や訛りをしゃべることがなくなってしまうこともあると本にも書いてあって悲しいなと思いました。

実際に方言でみんなが喋ってしまうと、誰も話が通じないため、共通語は、社会で暮らしていくためには必要不可欠です。でも、方言や訛りもその土地の文化なので、そんなに隠さないといけないだなんてなんだか悲しいなと思います。

だから、これからの私たちにできることは、方言や訛りについての偏見を捨て、他の方言の人たちとの言葉の違いを否定せずに違いを楽しむということが大切だと思います。まだ「方言は直すべきもの」という認識が多いですが、共通の場所や家など場所によって方言と共通語を使い分けることが大切だと思います。

(講 評)

方言は、その地方の文化、伝統であり大事なものです。莉子さんはその「方言」の大切さを発表してくれました。原発事故によって福島県民を否定するような心無い人もいましたが、それはわずかな人だと思います。逆に地方から見れば関東圏の標準語と言われている言葉も方言といってもおかしくはありません。莉子さんには自分の生まれ育った福島を大切にしてもらいたいと思いました。

## 『「All Lives Matter」と言える社会へ』

学校法人石川高等学校 2年 <sup>みどりかわ</sup>緑川 <sup>ちさ</sup>知紗

あなたは、「All Lives Matter」というスローガンを耳にしたことがあるだろうか。実は、「全ての命が大切だ」と主張するこの活動には、世界中から多くの批判が寄せられている。

このALM (All Lives Matter) というスローガンの成立背景には、人種差別問題が深く関連している。一年前、ジョージ・フロイド氏の不当な殺害を契機に、アメリカ本土を中心とする大規模な人種差別撤廃デモが起こったことを覚えているだろうか。その際に用いられた、「黒人の命を尊重しよう」というスローガンがBLM (Black Lives Matter) であり、その運動から派生した言葉こそ、ALMである。

私自身、初めてALM・BLM論争に遭遇した時は、非常に困惑した覚えがある。ALMという言葉における「All Lives」は「全ての命」という意味であり、その「全ての命」には当然「黒人の命」も含まれて当然だという認識を私は持っていた。どうしてALM主張が不当となるのか。この疑問は、インターネット上のムーブメントを見ればすぐに解決した。

前述の通り、ALMはBLMに追随する形で発生した言葉だ。しかし、実はこのスローガンは、人種差別撤廃を支援するための発言ではなく、人種問題から目を逸らしたい白人コミュニティの発言から生まれたものであった。彼らにとって、これまで無視してきた黒人の人権についての議論をすることは、都合が悪いことだった。だからこそ、「全ての命」という美しい理想へと論点をずらし、現制度への告発から意識を外そうと必死になったのだ。つまり、ALM主張の不当性は、その言葉自体に存在するのではなく、この言葉が使用された文脈や意図にあったのである。

一方で、BLMという言葉が向き合っているのは、「全ての命」の定義だ。これまで「全ての命」に含まれてこなかった「黒人の命」を保証することで、ようやく私たちはALMを主張することが可能になるのである。勿論、肌の色に関わらない平等を目指すという意味で。

日本では、国籍を理由とした暴力事件は滅多に起こらないし、報道もない。だからなのだろうか。人種差別を単に海の向こう側の問題として捉える人がいるが、それは

違う。少なくとも、私たちが「日本人」である限り、人権問題の関係者であることは確かなのである。これは、白人でも黒人でも、アメリカ人でも、アイヌ民族だって変わらない。間違いなく、すべての人達が人種差別問題の当事者であるのだ。

A L Tとして英語の授業に携わってくれたカナダ人教師は、離任の際「違いは、弱さにも武器にもなり得る」と語った。さて、ここで皆さんには、是非立ち止まって考えて欲しい。「違い」の価値を決めるのは一体誰だろうか。多くの人にとって、この答えは「自分自身」であると思う。しかし、誰かと暮らしをしていく中で、そんな「人と違う所を持つ自分」への評価が揺らぐことは決して珍しいことではないのだろうか。ここで言う、価値を揺るがす「誰か」とは、時にその社会であり、私であり、あなたである。確かに、保守的な私たちは「違い」を拒否しがちで、できるだけ異分子を避けようと躍起になることがある。そしてそれは、平穏な生活のための美德というより、異を排除する差別に近い。

多様性を認めることは、想像し、思い描くより遥かに難しいことだ。違う価値観を受け入れるためには、自分の持つ絶対的な正しさの概念を捨てる必要があり、労力を伴う。しかし、だからといって肌の色の違いで、思想の違いで、生まれた場所の違いで、誰かを蔑ろにすることは許されるだろうか。私たちは当事者だ。だからこそ、本当の意味で、「All Lives Matter」と言える未来をつくるのが、私たちの責任なのだと思う。

(講 評)

以前、奴隷として扱われていた黒人に、南北戦争中の1862年、アメリカ合衆国大統領リンカーンによって、南部連合が支配する奴隷たちの解放を命じました。解放後も黒人への「人種差別」は続き、東洋人に対しても同様でした。知紗さんは、この現実について詳しく説明し、どうすれば問題解決になるか発表してくれました。

とても難しい問題ですが、本当の意味で、「All Lives Matter」と言える未来をつくるために、私たち一人ひとりがどうとらえ、行動していけるのか、考えていければいいですね。

## 『一度きりの高校生活』

福島県立石川高等学校 3年 堀井 はるか

私が、高校へ入学してから早くも二年と二ヶ月が経過しようとしています。この約二年間、良い思い出も悪い思い出もたくさんありました。ですが、さまざまな出来事を通して思ったことはすべての出来事が一度きりで、とても大切な瞬間だということです。この言葉を見て、綺麗事だと思う人もいるかもしれませんが。正直、私自身も高校入学前は不安の方が大きくありました。周りの環境に慣れていけるか、新しい勉強についていけるかなど、様々な事を考えていました。でも、クラスメイトと話してみるとすぐ皆が優しい人だと分かり、不安が少しずつ薄れていきました。はじめの一步を踏み出すことは、とても勇気のいることですが、その先にはそれ以上に楽しい世界が待っているということを知ることができました。その後部活動に入り、さらに新しい仲間や先輩方に出会いました。私は、それまで経験のなかったバレーボール部に入りました。同級生の仲間には経験者が多くいて、焦りがありましたが、丁寧に熱心に教えてくれる人ばかりで入って良かったと思いました。その他にもたくさんのお話を学びました。仲間一人ひとりを大切に思うこと、一人の成功は皆で喜び、一人の失敗は皆で励ますこと、最後まで絶対に諦めないことを学び、成長することができました。もちろん、楽しいだけでなく辛いと思うこともありましたが、それはその時しか体験できないことで、大切な瞬間であったと今では感じるすることができます。

二年生になると、新型コロナウイルスの波が襲ってきました。学校が休校になり、登校ができて分散登校という形で、思うように勉強ができませんでした。様々な行事が中止か、規模を縮小して実施され、寂しく感じてしまったことを覚えています。普段の学校生活でもこまめな消毒や、換気を行ったり、人との距離が必要になったりしてきゅうくつだと思うことが多くなりました。中でも一番ショックを受けたことは、修学旅行の中止です。行き先は関西方面で、皆が楽しみにしていたと思います。仕方のないことではありますが、高校生的一大イベントと言っても良いものがなくなってしまったことは、悲しみが大きかったです。

しかし、そのような中で先生方は、何か思い出作りができないかと考え、遠足を実施して下さいました。その先生方の姿を見て、いつまでも暗い気持ちではいけない

いと思いました。きっとこんな事態は皆さんも初めての経験だと思います。でも、そういう時こそ落ち込まずに周りの人と助け合い、励まし合うことが大切だと改めて分かりました。そして、今まで当たり前だった日常はとても幸せなものだったということを感じました。好きな時に行きたい場所へ行ける、会いたい人に会えることなど、全てがかけがえのないものだったと思います。しかし、今までの日常はまだ戻らないと分かった時、私は今できることを全力で楽しもうと決めました。幸い、石川高校では、感染対策を行った上で球技大会やミニ文化祭などの行事を実施することができました。全てを全力で楽しみ、仲間との絆を深めることができました。それからは、普段の授業や、友人との会話、学校生活を今まで以上に大切に過ごしていると思います。そして、卒業までの残り少ない期間も一日一日大切にしていきたいです。

このように、今思い返してみると様々な出来事がありましたが、全て高校生でないと体験できないことです。一瞬一瞬がかけがえのないもので、全てが思い出になります。今、学生の皆さんは学校が面倒くさいと感じる方も中にはいると思います。ですが、今しか体験できないことばかりなので、ぜひ、全てを楽しんで毎日を過ごしてほしいと思います。

(講 評)

はるかさんは、高校入学を機にたくさんの人々と関わりながら、充実した学校生活を送っていることを発表してくれました。

入学前の不安な気持ちや、優しいクラスメイトとの関わりでその不安も少しずつ薄れていったこと。コロナ禍で、様々な行事が中止になっても諦めないで、今、できることを精一杯楽しんでいる様子など、とても分かりやすく良い発表だと思います。

残りの高校生活もあと僅かですが、目標とする進路に向かって頑張ってください。



**第37回（令和3年度）石川町少年の主張大会作品集**

石川町青少年健全育成推進協議会

〒963-7852 石川町字関根 165 石川町教育委員会生涯学習課  
電 話 0247-26-2566 F A X 0247-26-4992

